

# 歴史館だより

第23号

## 八国山探検隊がゆく



今回は東村山に住む人々にとって身近な自然、八国山はちこくやまを特集します。知っているようで知らない八国山。八国山ってどんな所なのでしょう。



### I 八国山の名は？



漢字が示すように、八つの国ということが関係するのだが、これは山頂から八つの国が見える、ということを表している。その内訳は相模、駿河、信濃、下野、常陸の五国は確かなようで、以下は諸説あり、伊豆、甲斐、上野、上総、安房、武蔵のうちの三国が入る。本当にそれらの国の山が見

えたなら、現在でも確定することも可能かもしれないが、残念ながら木々が生い茂った八国山からの眺望は開けない。よしんば眺望が開けていたとしても、汚れきった現在の大気では、遠くの山までは見渡せないだろう。

かつて見えていたと思われる山々は、相模が大山、伊豆が天城山、信濃が駒ヶ岳、上野が赤城山、下野が



男体山、常陸が筑波山、など。もしかしたら実際に何が見えるかということは重要ではなく、関八州（武蔵・相模・安房・下総・上総・常陸・下野・上野）が見渡せるくらい眺望がよい、という意味なのかもしれない。ちなみに、町田市には七国山という山があり、八国山と同じように、七つの国（の山）が見えると伝えられている。



住宅街の奥に連なる緑が八国山

全国に目を転じてみると、数字プラス国という山や峠は、ちょっと確認してみただけでも、北は北海道常呂郡の三国山から、南は九州福岡の三国山まで、たくさんある。そのほとんどが三国で、三国山という場合は地理的に3つの国の境にあるという意味であることが多く、八つの国が見えるという八国山とは成り立ちが異なる。残念ながら同名の八国山は見つけられなかったが、広島県には八国見山と七国見山がある。八国山と七国山があるのが同じ東京都で、八国見山と七国見山があるのも同じ広島県というのは偶然なのだろうか。八国山と七国山は同じ鎌倉街道でつながっており、八国山には将軍塚、七国山には鎌倉井戸という、新田義貞ゆかりの旧跡があるのも不思議な縁を感じる。ちなみに、鎌倉街道の行き着く先、鎌倉には六国見山がある。

## II 歩いてみよう

最寄駅は西武鉄道西武園線の西武園駅がいちばん近い。西武園駅からは八国山のほか、狭山公園、多摩湖、北山公園、下宅部遺跡はっけんのもりにも近く、行楽の一大拠点だといえよう。

西武園駅を降りて東方向へ道を下ってゆき、すぐに見える踏切を渡り、しばらく歩くと左手が西武園競輪場の有料駐車場になる。そのまま歩いて行って交差点に出る。そこで右側へ道路を横断(すでに右に渡っている場合はそのまま)し、右手の駐車場脇の細い上り坂の道へと折れる。50メートルほど登って行くと「八国山緑地」の木の看板が見えるので、そのまままっすぐ進めば尾根道へ入れる。

駅の北口を出た場合には、歩道を西(駅を出て右側)へ歩いていけば、突きあたりが交差点となるので、そのまま直進する形で交差点を横断し、駐車場脇の細い上り坂の道をゆけば、入口へたどり着ける。

尾根道はまっすぐ行くと將軍塚までたどり着き、久米川古戦場跡近くへ出る。途中で東村山側(南側)に折れると北山公園方面へ出られる。所沢側(北側)に折れると久米水天宮や、悲田処跡公園などに出られる。



ちなみに名作『となりのトトロ』では、メイが所沢の松郷からここまでトモロコシをもって歩いてこようとした。距離にしておよそ10キロ。結構遠い。メイのことを考えれば、縦横無尽に八国山を歩き回っても、たいした距離

じゃない。

誰でも気軽に散策できるが、気をつけたいのは雨上がり。木々に抱かれた八国山は晴れていてもしばらく道がぬかるむので、汚れてもよい靴を履いてくるのはもちろん、坂はつると滑りやすいので、滑りにくい履きなれた靴を履いて出かけた。季節によってはマムシやハチなどにも注意。また、緑地内にゴミ箱はないので、弁当などの持ってきたゴミは自分で持って帰ろう。

## III 植物いっぱい

江戸時代に著された『武野八景』では、將軍塚周辺はまばらに松が生えているだけで、他に高い木は見えない。同じく江戸時代の『武蔵野話』でもやはり松が尾根道に沿ってまばらにあるだけだ。おそらく尾根道からの眺望は頗るよかったに違なく、文字通り8つの国が見えていたのかもしれない。現在、尾根道を歩いてもなかなか松を見つけることはできない。米国から渡来した松を枯らす線虫、マツノザイセンチュウの被害によって、多くは枯れてしまったという。江戸時代と現在では見た目が全然違う山だったようだ。現在目立つのはコナラ。他にはリョウブ、アオハダ、エゴノキ、背の低い木ではシラカシなどが目立つ。今後も林の木々は移り変わってゆく。年間降水量から推察すると、常緑高木のシラカシに覆われた林になると考えられている。

緑濃い八国山も四季折々に花が咲く。早春の花としてはヤマウグイスカグラ。ピンクの小さな花がぶら下るように咲く。春は梅が白く咲き、次いで桜。桜にはイヌザクラ、ウワミズザクラ、ヤマザクラ、エゾヤマザクラ、カスミザクラなどの種類が見える。初夏には白いつぼ形のネジキ。梅雨の頃にはリョウブの白い花。明けて7月にヤマユリ、続いて8月にはオミナエシなどが咲く。秋にはオケラ



悲田処跡の碑

### とうさんどう ひでんしょ 東山道と悲田処

東山道は律令制が整った奈良時代に、支配を貫徹する目的で、平城京から全国へ敷設した幹線道路の一つだ。基本的には両側に側溝をもつ幅約12メートルの直線道路で、東村山も東山道武蔵路の経路となっている。ちょうどふるさと歴史館の下を通り、八国山の將軍塚の脇を抜けると考えられており、実際に東村山駅の北の大踏切付近で東山道が発掘されている。

その幹線道路に沿って設けられた施設が悲田処。悲田とは仏教用語で、貧者や病人など哀れみを受けるべき人のこと。悲田処は旅人の窮乏を救うために設置されたもので、『續日本後記』にその記録がある。武蔵と入間の国境付近にあったとあるのだが、今現在その場所を確定するのは難しい。推定される地として諏訪町、秋津町、多摩湖町、八坂神社周辺、所沢市久

米、清瀬市野塩西原遺跡が挙げられている。八国山の尾根道の中で北へ折れ、少し下ったところに悲田処跡公園があり、ここが所沢市久米の推定地である。

やリンドウが咲き、アオハダ、ウメモドキ、ガマズミ、オトコヨヅメなどが実をつけ、コナラの木からはドングリがパラパラと落ちてくる。晩秋にはセイタカアワダチソウが寒空の下、雄雄しく咲き誇る。セイタカアワダチソウは北米原産で明治期に日本に入ってきたと考えられ、猛烈な勢いで全国に広まった。

木々の間で目立つのはクマザサ。所によっては背の高さほどにも成長しており、まるで人が侵入してくるのを拒むように繁っている。ちなみに冬に葉の輪郭部分が枯れ、白くなって隈(クマ)どられることからこの名がある。漢字は「隈笹」となるが、辞書を見ると「熊笹」という書き方もある。

尾根から東南の斜面にはキノコが多数見られる。八国山で見られる食用の菌類は、コムラキシメジ、ハタケシメジ、ドウシンタケ、ウスキモリノカサ、シロオオハラタケ、ハラタケ、センボンイチメガサ、クリタケ、コウジタケ、チチタケ、など。毒のあるものとしては、タマゴテングタケモドキ、ベニテングタケ、テングタケ、コテングタケ、ヘビコノコモドキ、タマゴタケモドキ、フクロタケ、ナカグロモリノカサ、ニガクリタケ、オオキヌハダトマキタケ、シロイボカサタケ、など。食用のドウシンタケと毒のあるテングタケはよく似ているので注意。

## IV 動物の森

東村山市内には、イタチ、タヌキ、ノウサギ、キツネ、モグラといった哺乳類がいる。これらの動物が生きているのは、八国山があるから、といえる。もし八国山が開発され尽くしてしまったら、キツネやタヌキ、ウサギなどは生きていけない。彼らにとって八国山とは生きていくうえでなくてはならない自然なのだ。

しかし、八国山があればそれで充分なのかというと、

## 八国山の頂上はどこ？

八国山といえば將軍塚を指すと理解される場合が多い。大久保狭南著の『武野八景』では、將軍塚の半里(約二キロ)ほど西方の最も高いところを「八国峯」といったとある。この言葉どおりに地図をみると、現在の観音堂や西武園のあたりになる。一般に狭山丘陵東端と考えられているので、少しこの記述は信じがたい。江戸時代の野口村絵図を見てみると、今の白十字病院裏手(病院西の坂道と尾根との交差点)あたりに「八国塚」という表記が見える。將軍塚から300メートルしか離れていないが、もしかしたらこの「八国塚」が山頂だったのかもしれない。ちなみに、その当時、この塚の横には山王社が祀られていたが、現在では塚も社もその痕跡さえ見当たらない。

そうではない。彼らが生きるために必要な緑の面積としてはあまりに小さく、残念ながら絶滅の可能性もある。例えば1996年には市内とその周辺でタヌキの交通事故死が少なくとも6件以上あり、これはタヌキがより広い緑を求めて、八国山から旅立っていったその途中でのアクシデントと推測される。そして、悲しいことに、旅立ったタヌキがよりよい住処へと到達する可能性は、周囲の緑の状況を考えると、ほとんどないことがわかる。

一方で近年、都市近郊のタヌキは少ない緑の中でも生存できるようになってきた。これは人間が餌を与えていることが原因と考えられている。餌付けしている人としては親切で行なっているのだが、タヌキにとって人間に餌を依存するというのは、健全な状態とはいえない。

人間の介入という点では、ペットの遺棄も自然の生態系に大きな影響を及ぼす。八国山でも何件かシロウサギ



## 將軍塚ってなんだろう？

鎌倉幕府を倒すため、新田義貞は群馬県新田町の生品神社で兵を挙げ、一路鎌倉を目指し、上州から南下。小手指での緒戦のあと、久米川で戦いが起こったのだが、將軍塚はこの際に新田義貞が布陣して、旗を立てた場所と言われる。石碑は昭和12年に吾妻村(現所沢市)史蹟保存会によって建てられたもの。ただ、江戸時代から既にこれが本当かどうか疑う説があり、『新編武蔵風土記稿』では富士塚とも呼ばれていて、塚の上には小さな浅間社があったと記してある。また、古代の円墳ではないか、との説もあり、義貞を將軍とするのはおかしいとして、実は足利尊氏の本陣だったという説もある。「將軍」という言葉にこだわるならば、ここがちょうど村境だったこと

から、勝軍地藏や、渡来人が境に立てたという「將軍標」も連想できる。ちなみに、全国各地にも將軍塚はあり、坂上田村麻呂や義貞などの著名な武人にまつわる塚とされている。塚はいったい何なのか、それはまだ深い謎に包まれたままである。

